

雑事記(42)

盛丘 由樹年

朴炳植・古代言語と古代史の研究者

0. はじめに

朴炳植 (1930～2009 Byung-Sik Park. パク・ビョンシクとも表記する) は、古代日本の言葉と歴史を解明しようとして調査研究した人だ。その多くの知見は学究的であり、的を射ているので、私は高く評価したいと考える。私にとって古代史を学ぶ上で師というべき人物の一人だ。彼の著書を読むことで私の、日本古代史の理解が多いに深まったと考えている。その研究心や精神力に勝り、バイタリティーや才覚に富んでいた。波乱万丈の生涯を送ったことでも、興味深いので。ここにアウトラインや内容の一部を紹介したい。私の解釈でアレンジした内容も幾分入れた。

10年以上前のこと、私が日本人のルーツに興味を持ち、さらに日本が海を越えて朝鮮半島に攻め入った、白村江の戦いにも興味をもったので、古代史の書籍を読みかじっていたとき、図書館で朴炳植の著書にたま

たま出会った。名前からして朝鮮半島出身の人だから、身構えながら読んだものだが、その出身者でありながら、日本語が堪能であり、古代史に精通していることにおどろいた。

日本で通説・定説とされていることをひっくり返すようなことが次々に語られる。彼の印象を一言で表すと、〈この人は、下手な歴史学者より、ずっと日本を理解している〉となる。

なお、古代の国名や地名は、時代によって変わるこ
とがあり、表記や発音の違いがあつて、戸惑うことが
多い。基本的に地名の漢字は当て字だから、漢字その
ものの意味はない。主な例として、加耶かやについて、伽
耶を用いることがあるし「から」とも呼ぶことから、
加羅、韓とも表記する。

1. 概要

彼は、多くの現存する資料を読破したとみられる。

そして今日の日本語につながる古代言語、「ヤマト言葉」を解析した。古代における朝鮮語と「ヤマト言葉」の深い関係を明らかにしている。卓越した語学力で中国・朝鮮・そして日本の古典・古文を読みこなし、古事記・日本書紀・万葉集・風土記などの新解釈を示

したりしている。

記録された文字を解析することで歴史の実相がみえてくるもので、言語学と史学は、車の両輪的だ。

彼もやはり、日本をふくめ、東アジア（主に朝鮮半島と中国）の歴史にも精通し、それと日本との関連性をよく解説している。

人類学や考古学の最新の知見を多く取り入れていた。ただし、彼の場合1990年代のことであり、現在ではそれよりさらに進展がある。

古代史の従来の定説や学説に異議を唱えるなど、果敢に新説を打ち出している。歴史観の見直しになることだが、彼は、皇国史観や日本の侵略的行為を単に批判するのではなく、事実を追求し、真実を明らかにしようとする意欲が強い。などを解き明かそうとする、あるいは文献の解釈誤りを正すことに注力してきた人だ。古代の言語・歴史の闇を照らした業績は大きい。

彼の場合、その研究は基本的に独学的だが、その道の研究者との交流も少なくはない。日本にも知人を持っていた。研究者の姿勢として、科学的、合理的に思考して謎と向き合っていた。推論するにしても、何よりも根拠や事実（エビデンス）を大事にし、それまでの学説を踏まえただうえで、結論を出している。単なる

思い付きやこじつけで結論付けているわけではない。

彼は北朝鮮出身者だが、その後、家族とともにアメリカに移住した。彼自身は国籍にとらわれず、住みよいところを求めて自由に移動する国際人というべき人物だ。彼はそれぞれの民族を偏見の眼で見ない。思想的なこと、イデオロギーや宗教に偏るところはない。自国や出身地をひいきするようなどころはなく、他国を蔑視したりもしない。あくまでも中立的な立場だ。

われわれも「ヤツは北朝鮮人かよ。どうせ、被害者意識に固まり、日本を悪者と思っているんだろ」というような先入観や差別意識を持つてはいけない。

確かに、彼は、歴史学者でもなく言語学者でもない。市中の研究者の一人だった。「それで歴史や言語論を語る資格があるの？」と、軽んじたり、見くびったりしてはいけない。

ただ、皇国史観などは、為政者の都合でゆがめられたところには、厳しく批判的な立場をとる。日本人の歴史認識をおかしくさせたのは、各時代の為政者の権力によるところが大きい。戦前の人は皇国史観で教育されたから、彼が唱えた説には、従来の考えや定説とあまりに差がありすぎて、反感を覚えるかもしれない。

2. 古代史の要点

彼の古代史的な主張を要約すると――

- ・渡来系弥生人は、ほとんど朝鮮半島から海を渡って日本にきた人たちだ。彼らが弥生時代を切り開いた。
- ・その多くは、朝鮮半島東南部（今の慶尚道）の洛東河流域で文明を発達させていた倭人^{わいじん}だった。
- ・加耶族^{カヤ}とも呼ばれていた。古来中国で、倭人とは加耶族の人たちを言っていた。
- ・彼らは、海を渡るための造船技術を持っていたから、海を渡って、多くの先進的な文化・風習を日本列島に持ち込んだ。たとえば、弥生土器を持ち込んだ。
- ・そのひとつが農業技術であり、稲作を持ち込んだ。新天地の日本の平野や湿地帯を開墾し、稲作で豊かな収穫を得た。最初は北九州の平地で稲作を行い、徐々に、日本列島の各地に広げた。
- ・金属製品を持ち込んだ。特に、鉄の精錬・加工技術を持ち込んだことが大きい。朝鮮半島からの鉄製品を持ち込むこともあったが、日本列島でも鉄を生産するようになった。
- ・馬や牛などの家畜類や、犬猫も持ち込んだ。
- ・金属が強力な武器となり、馬が戦いに用いられる。

騎馬の戦闘力は高く、「兵馬」が戦力を表す。

- ・渡来系弥生人の進出先として、九州北部、中国地方、北陸、近畿に多かったから、今日においても、その民族的体質や文化・風習面での色合いが濃い。北海道・東北や九州南部には縄文的な色合いが少し残る。

縄文・弥生に関する基礎的な事項を示した。水田稲作に関して、最新の考古学知見では、北九州に紀元前10世紀後半に持ち込まれたから、今から約3000年前のことだ。それからの展開はゆつくりと進み、関東地方には紀元前3世紀になった。その間、約700年かかったという（NHKテレ・知恵泉）。

朝鮮半島に古くから倭人でいて、彼らの集団が小国を形成していたことが、中国の文献からわかるという。倭人である加耶族が日本列島に大きな足跡を残す。彼らが日本列島に移り住んだことで、日本人になってゆく。

当時の中国から見て、彼らは小柄な人たちだった特徴から「倭人」と呼ばれたとする説が有力だが、朴炳植によると、それはあとからのこじつけ的な解釈であって、しなやかという意味を持つ倭の字を「倭人」に適用した理由は不明とのことだ。

渡来系弥生人は、文化的な優位さがあるため、人口の大勢を占めるようになる。先住の縄文人との混血も多くあつたらう。主に、海を渡ってきた生活力のある弥生の男と、縄文の女が結婚するケースだ。渡来系弥生人が病原体も持ち込んだことで、縄文人が一層少なくなつたかもしれない。縄文人と渡来系弥生人は同化し、今日の日本人は平均的に、80%渡来系弥生人の血を引くといわれている。日本人は混血人種ということだ。それも均一ではなく、微妙に地域差がある。それは朝鮮半島の人にも言えることだろう。大陸の北方民族や中国・東北部の人が半島に南下してきていたから、その混合があるだろう。

3. 集団的渡航

朴炳植は、集団的に渡来があつたことを説く。つまり、移民だ。民族の移動が世界中で、いつの時代でも起きている。朝鮮半島の人々にとつて、日本列島は、未開の新天地だった。そのころ日本にいた原住民は縄文人と言われているが、朴炳植はそれをアイヌ人（現代アイヌ人の祖先）に特定している。

渡来の最短のルートが、朝鮮半島の南端・プサン（釜山）辺りから、対馬・沖ノ島を経由して、北九

州・博多までの航路だろう。対馬海流に乗って、山陰地方に行くルートも主要なものだ。山陰には古代都市・出雲が発達した。北陸、東北方面に行くためにも、日本海沿岸を通る航路はよく利用された。東北の日本海沿岸には、関東より早く稲作が伝わっている。

朝鮮半島では、古代に造船技術が発達し、海峡を渡るようになり、日本列島への渡航ブームがあつたと推測される。現代においても、プサンには古代の港が残っている。中国からの政治的圧力、社会的な人口増により土地を求める圧力が、人々を新天地に向かわせる動機となつたことだろう。

それぞれの集団は社会性を持ち、それぞれの地域で「村造り」をする。国として統治する仕組みも、大陸伝来のものだろう。統治する支配者は、権力を持ち、上級階層に君臨する。人々に敬われ、あがめられる存在になる。その下に、支配者を補佐する役人がいて、政務・行政を担当する。国の領土が大きくなり、領民の数も増えるにつれ、支配者の威光が強くなるものだ。支配をめぐって、集団同士の争いが生じ、それぞれの集団は武力や防衛力を備える。その強化に成功した集団が、ますます力を発揮することになる。

弥生の男と、縄文の女の結婚がありえたように、古

代においては、互いに通じる言葉を持っていた、と朴炳植は主張する。この言葉を「古代朝鮮語」としている。現代では朝鮮語と日本語とでは、大きく異なっており、通じることはないが、時代を経るにつれ、違いが大きくなった、とする。古代朝鮮語が語源となつて、それら言語に共通点を見いだせる。

特に、加耶族と縄文人は、体型的にも共通点が多く、古代の生活においては、高度な言葉の表現は必要なかっただろう。1万年前までの氷期においては、現在の海面が100メートルほど下がっており、朝鮮半島と九州は陸続きだったというから、人々や動物の行き来は自由だったのだ。1万年前にそれが海峡により断絶したわけだ。それが7000年ほど続く。

朝鮮半島の加耶族が稲作を取り入れるまでは、縄文人と同じような生活をしていたのかもしれない。かれらが稲作をいつ始めたのかは、考古学的に実証できるはずだが、まだよくわかっていない。

大陸では、長江(揚子江)中流域の湖南省で、約9000年前の粃痕(もみこん)のある土器が見つかったというから、朝鮮半島に伝わったのは、その後だろうけれど。

そして加耶族が稲作を携えて、日本に進出した。た

だし、稲作が可能な平野部が中心となる。平野部は、縄文人は利用せず、未開の荒野だったわけで、住み分ける形で、渡来人が進出しやすかった。開拓するためには、集団的な協力や道具作りなど、技術・情報が必要だから、縄文人がおいそれとは受容できなかったはずだ。収穫までの貯えも、その間、生きていくために必要だ。稲作技術を携えた人が進出しなければ、開墾できなかつたと思われる。稲作が各地に広まるのにはかなり年月がかかっていることが、それを示している。

朝鮮半島では、実在が確実な最古の王朝として前2世紀に朝鮮半島北部を支配した衛氏朝鮮とされている。国が大きくなるためには、王朝の成立が欠かせない。

「倭」に関して文献に現れるのは、中国・地理書の「山海経」が最初とされる。この書は前三〜四世紀に書かれたものをベースに、のちに漢・晋しんの時代に書き加えられたものだ。その中の一節に、

蓋国は鉅燕の南、倭の北にあり、倭は燕に属す

とある。蓋国について、朴炳植は高句麗の前身だという。燕は戦国時代の強国で、中国本土の東北隅、渤海湾の北辺に位置していた。直木孝次郎は『日本の歴史1、倭国の誕生』1973年刊の著書の中で、

『内蒙古南東部または東北地区(旧満州)南部あたり

に、倭とよばれる種族がいたのかもしれない」と書いた。

後漢書（414年ごろ成立した書）によると、辰韓、馬韓、弁韓（弁辰）三韓時代（それぞれ国というより地域名）に馬韓と、弁韓の間に倭の存在が記述されている。そこは、洛東江流域に加耶諸国があった場所だから、加耶諸国が倭と言われていたことになる。倭が古くから半島（あるいはもともと内陸部）に存在していたという証言だ。



弥烏邪馬・狗邪国とは、加耶諸国の主要な国

つぎに、それぞれの地域で小国が統合して大きくな

り、高句麗・百濟・新羅の三国時代となる。この時代は、北部に高句麗、西部に百濟、東部に新羅の三国が覇権を争った時代だ。しかし加耶諸国は基本的に小さいままだった。それが7世紀まで続く。この三国と加耶が、日本の古代史に大きくかかわってくる。

そのうち加耶諸国は、新羅と百濟に吸収・合併されてしまう。加耶の人々は祖国の地を失うことになる。彼らが日本列島に移り住むことが、この時にもブームになったと思われる。

その後、百濟も国を失い、その人々の一部が日本に流れてきた。朴炳植は、柿本人麻呂がその一人だとする。天智朝が、その官僚たちを多く採用したことはよく知られている。つまり、百濟政府の要人たちが日本に移された。

4. 朴炳植パクヒョンシクのプロファイル

ここで、朴炳植の人となりを紹介しよう。

朴炳植は、1930年、朝鮮民主主義人民共和国（北朝鮮）の咸鏡北道ハムギョ（東北端に位置する）で生まれたから、北朝鮮人だ。ただし当時、朝鮮は日本に併合されていたから、青年期まで「日本人」として成長したと言えるかもしれない。

1945年に日本の敗戦とともに、ソビエトとアメリカの軍隊が先を争うように半島にやってきて、北緯38度付近でにらみ合った。その後、1948年9月に朝鮮民主主義人民共和国が樹立された。

1948年10月、朴炳植は、彼が通っていた学校が統廃合され、進学が行き詰まっていたから、ソウルにいる親戚のつてを頼った。38度線を越えて南側に越境したから、初期のころの脱北者の一人だ。当時は越境は命がけだった、国境の川を渡っていた時（水かさが少ない時期だったから、歩いて渡れた）、背後で銃声の音を聞いたという。親の反対を押し切って新天地に飛び出すのは若者らしい行動だろう。

余談ながら、朝鮮戦争について私が概説すると――朝鮮半島で1950年6月から53年7月まで3年あまり（約1000日）に渡る動乱があった。北朝鮮軍が南に攻め入った戦いだった。北側がソビエト製戦車を中心とした機動部隊で攻め入ってくるとは、南側は夢にも思っていなかった。北と南で練引きされていたが、同胞だという思いがあつたはずだ。南には第二次世界大戦の連合国としてアメリカ軍が駐留していたが、戦闘の準備はろくにされていなかった。当初は、

首都ソウルが陥落した後も、進軍する北朝鮮軍に押され、各地で韓国軍・アメリカ軍は敗走を重ねた。全土が制圧される直前に、アメリカが体勢を立て直し、国連軍の名のもとに反撃に出た。これは北朝鮮指導者・金日成（イルシム）の「これは朝鮮国内の内戦であり、アメリカが本格的に介入しないだろう」という予想に反したとされている。

アメリカ大統領トルーマンの「朝鮮半島を赤い国（共産国）にさせてたまるか！」という意地だろう。アメリカは国連軍（21か国が派兵）を巻き込んだので戦いを始めた。日本からも「特別掃海隊」を組織し、出動した。半島の各港湾に敷設された機雷除去のため、米海軍の指揮下で掃海作業を行った。参戦したかどうかはともかく、日本は後方支援に多くかかわった。

ソビエトは表向き、派兵しなかったものの（一部の空軍兵士が高性能ジェット戦闘機に乗り、最前線に出ているとされる）、開戦前から、金日成の要請により準備段階から武器弾薬を供与するなどして北朝鮮を全面的にバックアップした。共産圏の拡大を図るというスターリンの思惑があつたものだろう。

中国は開戦前に、金日成の求めに応じて朝鮮民族の元中国軍兵士たち（約4万人）を、所持していた武器

を含めて北朝鮮軍に組み入れていた。開戦で国境に大部隊を配備したものの、それ以上の介入はないとされた。

開戦時には北朝鮮の兵力が、南より、そこに駐留するアメリカ軍を加えても、質量ともに上回っていた。金日成に勝算があったわけだ。北朝鮮側は一つの国にしようとする論だ戦いであり、その志はよしとしても、武力を用いたところに無理があった。

ソビエトと中国の支援によって始められた北朝鮮の、南への侵攻で、ほとんど全土が戦場になった。やがて国連軍の反撃にあい、押し戻され、北の国境付近まで押し込まれた北朝鮮軍だったが、またサプライズがあった。

中国軍の実質的な参戦だ。侵攻から約4か月後、国境警備のためと思われていた人民義勇軍という名の大部隊が北朝鮮軍の援軍として北部国境を超えた。中国軍が北朝鮮領に侵攻してきたかのようだった。

中国にしても、最高指導者・毛沢東の思惑として、このままだとアメリカ軍が越境して中国に侵攻されてしまうという危機感・不信感があったとされている。台湾を編入しようとしたことが、アメリカ軍が空母を出動したことなど威圧的行動で妨害されたことも、反

発要因だった。中国領側に逃げて来た避難民の増加にも、憂慮したことだろう。

ソビエト、アメリカ、中国という大国の指導者が、それぞれの大国の思惑をもって、大部隊の兵員を動員し、最新兵器を持ち込んで本気で戦ったのだから、さまざま。

一進一退の膠着状態こうちやくが続いた。中国軍は昼間身を潜めて夜に攻撃を仕掛ける戦術をとり、国連軍は手を焼いたとされる。連合国総司令官マッカーサーなどは「原爆を用いる戦術を考えた」とされる。それはトルーマン大統領が取り下げた。そして彼を解任した。

1951年7月に停戦交渉を始めたが、2年をかけてようやく暫定的な停戦合意に至った。結局は朝鮮半島全域を荒廃させただけで、元の38度線で停戦となった。

半島を分断する形で、南北の国がますますいがみ合うことになった。朝鮮戦争終結後も、アメリカ軍の一部は韓国に駐留したままだ。長年に渡って人の行き来や物流が制限されているのは、北朝鮮における三代に続く独裁政権の存在が大きい。北朝鮮は例によって、せっせと核兵器やミサイルを開発している。政権を維持したい一心だろう。それで周辺諸国から金品を脅し

取れるかもしれないし……。

5. 実業家としての朴炳植

朴炳植は南の韓国に移ったが、ソウルの叔父の家も貧しく、自立するしかなかった。彼は故郷に戻れなくなり、両親とも音信不通となった。無一文の身から、まさに裸一貫から立ち上がる。このへんは、彼の自叙传的ノンフィクション本『慟哭の海』で詳細を語っている。この本は、おどろおどろしい題名だから、内容の暗さを想像してしまい、私など、忙しきにかまけて本を入手してからしばらく読むのを避けていたほどだが、読んでみると、この本は、苦境からどうやって抜け出したか、という「自慢話」でもある。朴炳植青年は、運（チャンス）と才能を生かして、生き抜く。逆境にくじけず、苦勞しながらも、才能を發揮して道を切り開いたという出世物語になっている。時代的背景がよくわかる。想像していた「暗さ」はなく、むしろ面白い本だった。

著書の裏表紙などにあるいくつかの写真を見ると、彼は丸顔の、にこやかな表情をしている。バイタリティーのあることが伺われる。

彼の学歴として、本の裏表紙などに高麗大学校経営

大学院終了と紹介されている。高麗大学校といえは、韓国では名門校だ。彼は学生時代の専門（医学）とは異なる分野に研究を移したわけだ。多才な面を示している。

彼は韓国で実業家への道を歩んだ。先見の明のある若手経営者として頭角を現し、活躍し出す。その語学能力と人付き合いの良さで、信用を得た。

商取引の実務的な能力にも長けていた彼は、やがてひとつの会社を韓国の中堅の建設企業に育て上げた。それは急成長し、既存の大手建設会社を脅かす存在になった。

1979年、彼が中東の浚渫工事の事業に乗り出したとき、大きな挫折を味わう。彼はそれを「中東の悪夢」と表現する。その倒産間際の、緊張感みなぎるいきさつについては、著書『日本語の悲劇』の序文に詳しいが、概要を示そう。

会長の彼は、社運をかけた大きな事業として、サウジアラビアで大規模な港湾の浚渫工事を請け負うつもりだった。そのために工事機械を現地に送り込んだりして、すでに大きな資金を投じていた。彼自身も彼の地に飛び、準備万端のつもりで入札に臨んだ。しかし、どたんばになって韓国政府側の認可が下りなかった。

建設部長官（日本で建設大臣に相当）が、その海外事業に関して認可判を押さなかつた。彼の会社としては実績もあり、認可されない理由などなかつた。その理由として建設業界で独占的地位の確立をもくろむ財閥的企業の圧力があつたとする。要するに、その企業は認可権のある役人たちを利用して、ライバルとなりそうな新興企業の追い落としに出た。韓国政府の役人たちは、自国企業が正当な競争によって国際的に活躍することを奨励するどころか、足かせに回つていたことになる。

サウジアラビア在駐の韓国大使が、それに協力してくれた。韓国企業がサウジアラビアの工事を請け負えば、大きな進展になることがわかつていた。朴正熙大統領大統領（当時）の許にテレックスを打ったりしてくれたが、本国からの応答は何もなく、時間が切れた。結局、朴炳植会長は、許可なしで、フライングの形で入札した。入札後の顧客との交渉で勝負をかけたが、銀行が債務保証を拒否してきた。政府系の銀行だったため、政権の意向を忖度した形だった。銀行からの資金がなければ、事業の遂行は無理だ。万事休止になり、彼の会社は倒産した。

国際的な事業の場で、自国の同業者によって足を引

つ張られた形になつた。その倒産で、300人超の従業員やその家族を路頭に迷わせてしまったのだから、彼の責任が重くのしかかる。

くやしきで一杯になる。彼の怒りは心頭に発し、失望に落ち込み、酒を飲まずにはいられない状態が続いたという。

6. 語学・歴史学への転身

その立ち直るきっかけは、語学を研究することだったと彼はいう。彼の才能の秀でたところの一番は、語学だろう。彼らしく、書の中でそれを自認している。

『日本語の悲劇』のプロローグより

「途中で這い上がつて、もう一度自分を発見し、その憤りがある目的のために生かしたという点ではほめられてもいいのではないかと思う。そして私の選んだ言語学の語源研究が私の天分に最もかなつたものであることを、私は神に感謝している」

「いきなり言語学の研究に入ったなどというと唐突に聞こえるかもしれないが、もともと私は語学が大変好きだった。土木関係の仕事が始める前には貿易をやつていたが、それも外国の言葉が好きでやつていたようなものだった。ドイツ語やラテン語は、医学専門学校

時代からだし、そのころは中国語もフランス語ももうやっていた。それからロシア語やギリシヤ語もやった。その後アメリカに行つてスペイン語をやつた。それくらい私は語学にひとかたならぬ興味と関心を持っていた」

「自分には語学力がある。これを、古代の言語の解明に生かそう」と思い立つ。彼は新しい光を見出した。

あの事業の失敗がなければ、われわれは彼の著書を目にすることがなかったわけだから、運命がどう転ぶか、わからない。

国際感覚を持った人だから、アメリカに拠点を移し、韓国系アメリカ人になつていた。アメリカ・ニューヨークの自宅で、何かに取り付かれたように、集中して研究生生活を送つたことが、著書のところどころに書かれている。彼自身「『加耶族の靈』に取り付かれた」とも表現している。参照すべき日中韓の文献や資料など多くのものは、ニューヨークでも手に入ったとみえる。

なお、日本で著書を出版するようになって、現地調査のためにも、島根に「仮寓」を構えて、数年間日本にいた時期があつた。

7. 彼の学究心

彼の文章は明確であり、歯切れのよい解説をする。探求心が強く、論理的な思考を重ねてゆくから、説得力がある。彼の言い方はきわめて明快であり、率直に語っている。

正しいことを追及する研究者としての真摯な姿勢を貫いている。齒に衣着せず、自信を持って持論を展開するところがある。はっきりした物言いに、一部の人から反発を招くかもしれないが、私としては、あいまいさが無いから、むしろ好感を持つている。ときにその語り口には断定的なところがあり、人によつては、あつかましさを感じられ、傲慢と捕らえる人がいるかもしれない。特に頭の固い学者の中には、

「土建屋上がりの、どシロウトのくせに、これまでのオレの学説を無視するようなことを言いやがって、気に入らんやつだ」などと反発するむきもあるかもしれない。実際に、一部の学者は、言いがかり的な批判を公言した。

朴炳植は、そんな批判に敏感に反応し、著書の中で、名の知られた学者を名指しで反論をしたりしているのだから、なかなかの熱血漢だ。そんな批判には当たたら

ないことを、みごとに反論している。正しいことを主張することに憚らない。時にはむきになって、その言い方がきつくなつたが、朴炳植の論調には妥当性がある。

近年、考古学的に新しい発見があり、年代測定やDNA解析などの最新科学技術で解明されたことも多く、優秀な学者や学識者たちが意見を述べ、新説を語ることで、古代史の真相に迫ることがいくつつか発表されている。従来の定説が覆されるのは、おもしろいことだ。

歴史は真実を語らなければならないが、権力を掌握した為政者によって、歴史的事実が隠蔽されたり、捻じ曲げられたりすることがある。正史とされている書物にも、それが疑わしい例も数多くある。政治的に情報統制が行われてきたわけだ。彼らにとって都合な真実は常に隠され、架空のできことを真実であるかのように語り、虚飾にまみれた物語を創作したりした。

神話がそれにあてはまるだろう。特に古代史においてはその傾向が強い。ただし神話の中には、モデルとなった出来事を伝えるために、おもしろおかしく脚色されてはいるものの、その本筋をはずしていないものだ。古事記などは読み物としておもしろい。

彼の場合、「一般受け狙い」と見られることがある

かもしれない。〈自分の研究を論文としてまとめることも大事だが、一般に広く知らしめたい〉という希望があった。論文にすると一部の学者が読むだけだから、一般にも受けるように書いた、というのが真意だろう。彼の新奇な説は、マスメディアにも注目され、古代史ブームに乗って、彼も一躍「時の人」になつたらしい。講演会にも招待されたり、私は知らなかったが、テレビの情報番組にも出たりして、その自説を解説したとある。

その研究業績は、一部の日本の研究者に認められた。しかし、日本の学界主流は、彼を異端者扱いする傾向があり、軽視しているようだ。

8. 著書の紹介

彼の著書の題名を読んだだけで、どんなことを発表してきたか、おおよそわかると思うので、著書一覽を示そう。専門書として部数の限られたものもあるが、大手の出版社によって一般向けに出版されたものもある。このジャンルの本なら、売れるだろうという期待を持たれたのかもしれない。

彼の本は、一時期、一般図書館にも置かれていたが、最近ではそれも「仕舞い込まれてしまう」傾向があり、

入手は難しくなっている。入手しやすい文庫版になっているものも限られている。

以下は参考文献でもある。日本で出版された著書の
一覽（ウィキペディア「[Wikipedia](#)」を参照した）

『日本語の悲劇』情報センター出版局 1986

のち学研M文庫

『ヤマト言葉の起源と古代朝鮮語』成甲書房 1986

『クマノは何語を話したか』ソンドル博士の方言講座

九州・沖縄編』毎日新聞社 1987 ミュンブックス

『日本原記 天皇家の秘密と新解「日本書紀」』

情報センター出版局 1987

『日本語の成立証明 「音韻変化の法則」と身体各部

位名称・人称代名詞など』情報センター出版局 1987

『日本語の発見 「万葉集」が読めてきた』

学習研究社 1987

『ハッケヨイ！ハングル 日本語のルーツは古代韓国

語だった』ソンドル博士の語源講座』

毎日新聞社 1987 ミュンブックス

『万葉集の発見 「万葉集」は韓国語で歌われた』

学習研究社 1987

『ササノオの来た道』ソンドル博士の方言講座・出雲

編』毎日新聞社 1988

『卑弥呼は語る 言葉が復元する日本の古代史』

学習研究社 1989

『古代朝鮮と日本』共著、泰流社 1989.9

『出雲風土記の謎 秘められた人麿の怨念』（小説）

毎日新聞社 1990

『万葉集枕詞辞典』小学館 1990

『出雲族の声なき絶叫 記紀の陰謀と出雲風土記の抵

抗』新泉社 1991

『消された多氏古事記 まつろわぬ者の秘史』（小説）

毎日新聞社 1991

『日本語のルーツは古代朝鮮語だった 「吏読」に秘

められたヤマト言葉の起源（記紀・万葉を古代朝鮮

語で読むための必読シリーズ』HBJ出版局 1991

『朴炳植日本古代史を斬る』学習研究社 1991

『柿本人麻呂と「壬申の乱」の影 万葉の歌聖は百済

人だった 栄光と哀しみの歌に秘められた亡命歌人

の叫び』HBJ出版局 1992

『慟哭の海』（小説）毎日新聞社 1992

『消された「ウガヤ」王朝 『記紀』の裏にひそむ謎

を解く』毎日新聞社 1993

『ヤマト原記 誰が日本人気質を創ったのか？』

情報センター出版局 1994

『ヤマト渡来王朝の秘密』三一書房 1998

『ヤマト言葉語源辞典』BANANA出版 2001

1989から2001年の間に合計23冊を上梓した。同一時期に集中して多く書いた。本のジャンルとして、エッセイのようなものから、小説として書いたものもあるが、基本的には解説書あるいは、まじめな学術的論文あり、研究書に近い。辞典まで書いてしまうとは、なかなか精力的な仕事をした。小説といっても、歴史小説であり、実在した人物、例えば柿本人麻呂をモデルにした伝記のようなもので、主人公がおもしろおかしく活躍するというものではない。彼自身、小説としてはうまく書けなかったと告白している。

一般向けの歴史関連書籍として刊行されたものが多く混じる。中には、部分的に内容の重複があったり、改変したものがあつたりするから、一部の本を読むだけでよいだろう。

言語を比較することで、語源(ルーツ)がわかり、文化や歴史がわかってくるものだ。

日本の各地の方言が古代朝鮮語の語源に近い形で残っていることを説明しているのが、『クマンは何語を話したか ソンダル博士の方言講座九州・沖縄編』、

『ハッケヨイ!ハンゲル 日本語のルーツは古代韓国語だった ソンダル博士の語源講座』、『スサノオの来た道 ソンダル博士の方言講座・出雲編』の3冊だ。架空の人物の会話形式で、質問に答える形で方言の意味などを説明している。言葉の語源を解析する名手ぶりをみせている。

9. 音韻変化の法則性

日本人は、縄文時代に縄文語を話していた。基本的に縄文語はアイヌ語に近いという。縄文語には「ら行音」が多いことが、アイヌ語に由来する北海道の地名でもわかる。それは歯並びに関係しているのだそうだ。かみ合わせがあつていると、ら行音を発しやすい。歯のかみ合わせがずれていると、ら行音は出しにくい。それがずれているのが弥生人の特徴のひとつでもある。彼らは、ら行音の言葉を言いくいのだ。そのため、ら行音を「や行音」の言葉に代えてしまう傾向がある。現代でも、話し言葉で「ら抜き」の現象がある。

同じ言葉(語源)なのに、音がまったく異なつてくるケースは多い。

世界の言語は、常に多様化してきた。話し言葉など、どんどん変わってくる。文字がその変化にブレーキを

かける役目を果たしてきたが、言葉の多様化は止まらない。言葉を統一、標準化する努力が、マスメディアや政府によってされてきた。やはり言葉が異なり通じないと不便だ。

朴柄植が一番強く主張する「古代朝鮮語がヤマト言葉になった」という命題をセオリーとして証明するためにはエビデンスがなければならぬが、音韻変化に法則性があることを見出して、これで証明している。

古代朝鮮語の語源がどう変化して、ヤマト言葉になるのか、その変化に規則性があるということだ。

古代朝鮮語とは、古代において朝鮮半島で話されていた古語をいう。それがヤマト言葉に変化し、一方では、現代の韓国語にもつながっているということだ。

古代朝鮮語の直接的な文献は失われているが、古代朝鮮語がどのような言葉で、どう発音されていたか、日本側の古文書で類推できるという。それは万葉集であり、古事記、日本書紀だ。これらは話し言葉も漢字で書かれているから、その吏詠*を解析すればわかると朴柄植は解説する。

現代の慶尚道に残る方言の特徴が、ヤマト言葉にもあるという。

慶尚道は、古代の加耶族がすんでいた地域でもある

から、その人々が日本列島に移住したという説にもつながる。かれら加耶族が話す言葉（古代朝鮮語）が、ヤマト言葉になったというわけだ。

そして、そのヤマト言葉で歌を詠み、万葉集にまとめ、古事記・日本書紀にその言葉を記事にした。

ヤマト言葉を日本国内にはやらせ、標準語的なレベルに押し上げた。傍証として、古事記・日本書紀の記事には、古代朝鮮半島と日本列島の間に頻繁な人の往来があったことを示す記録があるが、通訳がいたという記録はないのは、双方が同じ言語を話していたからだとする。

主な音韻変化には、以下がある。

- ・ 子音が置き換わってしまう
- ・ 母音が置き換わってしまう
- ・ 音が脱落する

なお、日本においては、加耶族が使っていた母音について、年月を経てもともと8音あったのを5音に減らしてしまったことが「日本語の悲劇」として朴柄植が指摘している。それは縄文文化との融合のためだったかもしれない。当初は、8音の母音を使い分け、聞き分けて会話をしていた。万葉集・古事記・日本書紀にもその痕跡が残っていると言う。

万葉集は歌われた時代が長いため、初期の頃の作と後期の作で、用語の違いがあるという。さらに、作者の出身地、大きく百済系または新羅系によって、助詞などの言葉の使い方に差があり、つまり方言が読み込まれているという。

文字として中国の漢字が導入されたが、彼らが独自に話す発音との対応が複雑になった。後年の言語学者の頭を悩ませることになった。同じ母音に甲類と乙類があるというように、差があることが認識されている。そのうち、5音の母音（あいうえお）だけになり、人々が母音の微妙な使い分けをしなくなると、真意が同じにくい不便さが生じた。同音異義語がおおくなる。特に朴柄植が一例として指摘したのは、第一人称と第二人称の元々の言葉が同じになってしまったことだ。アクセントを言葉のどこに置くかによって、聞き分けられたのかもしれないし、文脈から判断するしかない。

*^り吏^と読……漢字の音訓を借りて朝鮮語を記すのに用いた表記法。漢字を朝鮮語の語順に並べ、助詞・語尾などの文法的部分と一部の名詞をこれで記した。新羅時代に始まり、民間の契約などでは19世紀まで使用りとう（広辞苑）

10・万葉集の解釈

朴柄植は万葉集にも詳しい。音韻変化の法則性を見出したのは、万葉集の言葉を解析したからでもある。万葉集の歌を理解するためには、古代韓国語の語源に基づき解釈を必要とする。

いくつかの有名な和歌について従来の解釈の誤りも指摘しているし、枕詞にも、その意味を深く考察している。従来、枕詞については定型的な「決まり事」のように扱って、意味が軽視されていたところがある。

例えば、あをによし

あしひきの

あかねさす

ぬばたまの

などがある。おおよその意味は一般の人にも感じ取れるが、朴柄植は厳密に解析している。それらの真意は著書を読んでほしい。意味不明なものとして、

「しらぬい 筑紫の綿は身に着けて……」

万葉三三三六（短歌）

しらぬいが筑紫の枕詞になっている。でもなぜ、しらぬいなのかという疑問を持つだろう。

一般的な説明では、古事記に「筑紫国は白日別」とあ

ること由来するとされている。この「白日別」の本来の訓みは「サラバル」だと朴炳植は説く。サラバルとは、ス羅サラバルであり、新羅の古名だ。つまり「しらぬい筑紫」は「新羅 筑紫」という意味になる。北九州筑紫に新羅の分国があったことになる。

527年(継体21)、継体朝廷が百済を救援するために新羅を打とうとしたとき、筑紫の君・磐井いむいの乱があった。この反乱で磐井は、半島に派遣するために動員した6万の大軍をほぼ2年間、九州にくぎ付けにした。ついに磐井は戦死する。磐井が命懸けで戦ったのは、磐井が新羅派の首長だったからだ。そして新羅に忠誠をつくした。

11・言葉の謎解き

朴炳植は日本語に秘められた謎を究明しようとすることに熱心であり、いくつかの謎を解いている。

・数え方の謎、「ひとつ、ふたつ、みつつ、……、このつ、とう!」

朴炳植は、これは「数え歌」であり、意味のある文章で歌いながら覚えるもの、としている。ひふみさんに物をねだる文句となっているという。さらに男女の睦言にもなっているという。

・学者が意味不明としてきたワザウタの意味

日本書紀にはいくつかの童謡(ワザウタ)が編集されており、そのワザウタの解釈は難しい。なかでも、斉明紀のそれは、専門の研究者の間で「これは意味が分からん!」とサジを投げていたものだった。単純に訳してもまったく真意がつかめなかった。

それを聞きつけた朴炳植は、その原文を朝鮮語に変換して解析し、意味のあるものに翻訳してみせた。これで、朴炳植が脚光を浴びるきっかけになった。ワザウタは、政治的な皮肉や批判の意味を込めたものなので、編集者が直接的な表現を避けて、原音をいわば暗号化して組み込んでいた。その一節、「雨が降るといつても遊びに行く」 斉明朝が百済救援のために派兵したこと(白村江の戦い)を皮肉っている。

・法隆寺の建築木材に書かれた落書き

法隆寺には711年に再建された日本で一番古い木造建築物が残っている。その解体修理の際に、五重塔の初層天上の組木に「落書き」が発見された。朴炳植が意味を解いた。建設当時に漢字で書かれた九文字は、当初は専門家によって和歌の一

部と判読されたが、朴炳植が解析したところ、「難波のニサクここ」と読めるという。難波から来た大工のニサクさんが自分の存在を書き記したものだ。さらに3人の署名を見つけた。つまり4人の寄せ書きだった。朴炳植は、彼らは渡来工人で、百済なまりがあるとまで指摘した。

12・加耶族

加耶族の渡来の後に、百済や高句麗の人々の間でも、日本列島に移り住むようになった。百済や高句麗は、中国に近く（高句麗は中国と国境を接していた）、中国の先進文化を持ち込む担い手となった。彼らが中心になって、文字（漢字）や仏教、法律、その他学問を日本に伝えた功績は大きい。

高句麗の人は、主に、日本海を直接渡って北陸・能登・新潟方面に進出した。越と呼ばれた地域だ。越は高句麗をさす言葉であり、ヤマタノオロチ伝説の「オロチ」も高句麗をさすもので、語源的に立証できると朴炳植は言う。

百済の人が多く住んだ地域として、今の長野県が上げられる。

日本各地の知名に、それぞれの集団にちなんだもの

が多く残っていることが、金達寿（1919～1997）の著書に詳しい。

政治体制、産業技術、宗教・信仰……それに伴う言葉を入ってくる。人々の話し言葉や文字も入ってくる。人々は、集団を形成する傾向があり、日本列島は、それぞれ住み着いた人々の違いで、「お国柄」や県民性の特色を出してくる。



「加耶族」たちの国（『日本原記』朴炳植）より
網掛け部分が加耶諸国のエリアを示す

朝鮮半島を縦につらく太白山脈の西側と東側では、

民族のかなり違いがあるとされる。対立も激しかった。加耶族は、二つの大きな勢力、百済と新羅に挟まれながらも、加耶諸国は比較的長く存在していた。六加耶連盟を結び、対抗するが、徐々に切り崩され、それぞれに編入されることになった。

そのため、加耶族を基本とした日本列島だけれど、その勢力図はおおきく百済派と新羅派に分かれ、加耶の本国を失った後でも、抗争が続いた。

加耶諸国の中で、加耶諸国の盟主的存在だったのが、洛東河上流に位置していたウガヤ（上加耶）国であり、渡来した人の数も多く、初期に、日本列島開拓の主導的役割を果たした。次に、それに対抗する勢力として洛東河下流のアラカヤ（下加耶）国があった。

加耶諸国は兄弟国でありながら、それぞれ分離独立指向がやや強いのが特徴だろう。初期においては、新羅も、加耶諸国の一国で、新羅（斯盧）と称していた。ウガヤ（上加耶）、アラカヤ（下加耶）という名称は、略称であり、彼ら自身の、地域・国としての表記は、弥烏邪馬国、金官加耶（金海加耶）だ。加耶諸国同士であっても、競合するライバルであった。

本家に当たるのが、ウガヤで、現在の高霊の地にあった。ウガヤといえ、神の名にも現れてくる。たと

えば、古事記に出てくる、ウガヤフキアヘヅノミコト、ウガヤから来た神聖な者という意味がある名前だ。古代初期には、天皇の和名にその出身地を表す言葉が含まれており、やはりウガヤ出身者が多かった。

分家筋にあるのがアラカヤだった。時代を経るに従い、ウガヤの力は弱まり、立場が逆転する。アラカヤが経済発展を遂げる。百済の影響を受けて力を増したりして。本家を上回る勢力となった。

西暦42年にアラカヤ（狗邪国）の首露王が、六加耶連盟の盟主となった。北九州にも似たような名前の狗奴国がある。どこに位置するかで漢字を使い分けているが、同一の国だ。それは狗邪国の分国だった。

西暦57年に、中国側の記録に「倭奴国貢を献じて朝貢す。使人自ら太夫と称す。倭国の極南界なり。光武賜うに印綬を以てす」とある。「漢委奴国王」と刻された金印をもらったのは、このアラカヤの王だろう。倭国の極南界にある国とは、金海にあった狗邪国だろうし、そのときの国名を「倭奴国」としていたわけだ。朴炳植は、これを倭奴国と読むべきだとする。

その後、本国の消滅に伴い、金印は北九州の狗奴国に持ち出され、志賀島に埋められた、と考えられる。

加耶諸国のなかに走漕馬国があり、かの人々は南九

州に定着したとする。「走漕馬」は、日本書紀（欽明記二年条）に「卒馬」と記録されており、日本音では「ソチマ」、後日のサツマ（薩摩）の語源になったと朴炳植は推測している。

加耶族は基本的に太陽を信仰する人々だった。

加耶族の紋章の一つは、太陽を象つて、丸い中心部から周辺に何本か火炎のようなものが回転するように出ているものだ。この紋章は盾飾りにも使われ、直径10センチほどの金属製のものが日本でも出土することがある。日本の考古学者が謎の金属器としていたものだ。巴形銅器という。

この紋章は引き継がれたようであり、現代でも、慶州・釜山の市章としても使われていた。（私は2014年5月に韓国旅行「古代遺跡をめぐる団体ツアー」の際、その路上のマンホールのふたにこのマークがあるのを見たことがある。なるほどと思った）

13・ヤマト

ヤマトについて、漢字で当てると、倭、大和が知られているが、日本もヤマトの当て字だとする。日本はヤマトと訓読みするのが正しい。つまり、ルビをつければ、倭、大和、日本。

朝鮮半島にも倭があつたから、区別するために日本列島の倭には大をつけて、大倭と表記することがある。太陽を「ラ」といつていた。太陽を指す漢字は「日」だ。この日を「や」と訓ませる。本はモトという読み方があり、これを「マト」と音韻変化すると、日本は、ヤマトと読める。ヤマトの当て字として「日本」を用いたことは、国号としてふさわしかったといえる。

古事記では倭を用いて記述していた部分が、日本書紀ではそれを日本に置き換えている。

魏志倭人伝に出てくる邪馬台国、あるいは邪馬老国。これらも、朴炳植は、邪馬台国、邪馬老国と読むべきだという。台も壺も「と」と読めるという。そもそも倭国の都であつて人口も一番多かった都市の地名なのに、地名は後々まで残りやすいものだが、ヤマタイ、ヤマイチなどという地名が残っていないし、日本の文献にも記載がないのは、読み方が間違っているからだ、と朴炳植は説明する。

卑弥呼の後を継いだとされる女王の名、臺与についても、トヨと読むべきで、イヨではない。

ついでに、そこに表記された地名の一つ「投馬」は出雲を指す。投馬は、ヅマになり、敬称の「イ」をつ

けてイヅマ、さらにイヅモになったと、音韻変化の一例として朴柄植は説明する。朝鮮半島から邪馬台国へ行くルートは、「投馬」を経由するとあるから、日本海側の海岸に沿って水行し、出雲の先で陸行したわけだ。瀬戸内海ルートより日本海ルートのほうがよく利用されていたという一例だろう。

西暦636年に完成した『隋書』に「倭国は……邪摩堆に都す。すなわち「魏志」にいわゆる「邪馬台」なるものなり」とある。この邪摩堆は、ヤマトと読める。漢字の表記が変わっただけで、ヤマタイがヤマトと訓みが変わったわけではない。

西暦702年ごろから、ヤマト朝廷の公式文書に国号の表記として「倭」に変えて「日本」を使うようになったから、しばらくして、この語句をニホン、ニッポンと読むようになった。本来の「ヤマト」という訓読みは、廃れてしまったわけだ。

さて、「ヤマト」の意味は何なのか。

朴柄植は、「ヤマ」に「台」を付けたもので「ヤマを基にした連盟体」の意味を持つと説明する。ヤマトは加耶族の盟主だったウガヤの正式名、みおやま弥烏邪馬から来ている。弥烏は敬意を表す接頭語だから、邪馬が本体だ。「ヤマ」の原意は太陽であり、加耶族の象徴だ。

場所を意味する言葉でもある「ト」をつけることによつて、この地について「ここは加耶族の中心地だ」と主張しているのかもしれない。

ナラ、アスカ、イカルガ、カシハラにも、古代朝鮮語の原意が含まれているという。朴柄植はウガヤのヤマト朝廷が最初に定めた都の場所は、飛鳥あすか（奈良盆地の南部）だったと推測している。漢民族最初の都の名称が「アサタル」だったことにちなむという。

博多で行われる祭り、「山笠」には「ヤマに行こう」という意味がある。

京都に「山鉾巡行」の行事がある。朴柄植は「ヤマボコジコ」が語源と推定し、この意味が、なんと「ヤマが恋しい」なのだ。ヤマを出た加耶族の人たちが、祭りで憂さを晴らしている図だ。北九州と近畿地方は、確かにウガヤの人が多く進出した場所だろう。

さらに朴柄植は、オロチ、エミシ、クマツ、ハヤト、サンカと呼ばれた地方の人たちの語源や正体を明らかにしている。

14・任那

みまな任那とは加耶諸国を指す名称だが、戦前の認識では、朝鮮半島にあった日本の出先機関とされていた。特に、

それを任那日本府と呼んでいた。少年の頃の私も、そういう認識だった。しかし、これはまったく逆の立場だったことを朴炳植は明らかにしている。

任那は、その言葉の解析から「主君（天皇）のいるところ」を意味するという。そこは、いわば宗主国あるいは、本国だ。任那が宗主国だから、日本は「植民地」あるいは「属国」ということになる。

任那があったのは、最初はウガヤの地だった。ウガヤが百済に編入されてからは、次の任那はアラカヤ（金官）の地に移った。

日本書紀などには「任那から使者が来て貢物を持ってきた」などという記述が見られるが、貢物をしたのはヤマト朝廷のほうだろう。宗主国が半島にあったことが、日本としては相当コンプレックスになったことの表れだろう。

414年建立の高句麗「広開土王碑」に刻された任那について、「永樂9年、倭賊退却し、任那加羅の從拔城に至る」などと記述されているところがある。この辺の記述は、高句麗軍が倭軍を迎え撃って撃退した、というストーリーになっている。倭賊の主力が加羅にあつたということだろう。この加羅は、加耶と同じ意味で、アラカヤを指している。任那加羅とは加耶諸國

の盟主を表すものだ。その任那は、その主導的立場上、ヤマト朝廷に派兵を要請できる。「辛卯年（391）、倭が海を渡ってきた」という記述が、その要請によるものだろう。

（2016年4月、私は中国東北部に残る古代朝鮮遺跡を巡る団体ツアーに参加し、地方都市・集安^{チヤンアン}近くの広開土王碑の実物を間近に見てきた。当時はしっかりと保護されていたが、判読しにくい状態だった。それらの文字を読み取った人びとの苦労がしのばれる）

結局、562年に任那は消滅する。それも新羅に吸収されたことになる。任那を崇拜してきた倭國の人々の中に「新羅憎^{にく}し」の感情が、後々までくすぶる。「いつか、取り返してやろう」という気持ちはどこかに残っているのかもしれない。豊臣秀吉や伊藤博文の心の中に残っていたりして……。

15・天皇の系譜

天皇の系譜は万世一系とされ、その遠い祖先は神につながっているというが、いまだき、それを主張すると、「ウソだろう」と言われるのがオチだろう。

日本書紀は、もともと天武天皇が作成を指示したものだ。彼が天皇の位につくための正当性を証明したか

ったと考えられる。近江朝廷を武力で倒したのだから、トップとなる権利はあるとしても、人々から正統な天皇とみなされるには、根拠が弱かった。対抗する勢力が納得しない懸念があった。そこで、歴史書という証明書を書かせたものだろう。古事記が先に完成したが、官製の歴史書とは認められなかった。推古天皇までの記事で中断し、以降は実質的に白紙にされたわけだろう。そして全面的に書き直されたのが日本書紀だ。

朴柄植は、書き換えたことのひとつは天武天皇の出自に関することだと断言する。それは天武天皇出生の秘密としておこう。

出生はどうであれ、天皇は国家元首として指導者たりえる人が望ましい。(変な人が総統になったり大統領になったりすると、みんなが困るのだ)

以下に、建国から変遷した朝廷の大まかな区分を朴柄植の説に従って示す。

① 第一期ヤマト王朝、ウガヤ王朝・朴^{パツ}氏の政権、建国から仲哀天皇の崩御まで

ウガヤが主導権をもつて、連合政権を打ち立てていた。

古事記・日本書紀においては神武天皇が初代天皇とされているが、その前から、ウガヤ系の王朝が

73代続いていたという古史古伝の言い伝えがある。古事記・日本書紀以外に、まともな歴史書はないとするのが学会の大勢だが、朴柄植は、複数の古史古伝(竹内太古史、九鬼神伝精史、富士高天原朝史、上紀などの古文書)がその王朝の存在を記録しているから、「その伝説は信じられる」とする。古事記・日本書紀の編集者は当時の政権幹部(たとえば、藤原不比等)の指示に従って(あるいは付^{そんたく}度して)それを書かなかつたとする。その分を埋め合わせするかのように、初期の10人ほどの天皇の在位期間をやたらに引き延ばしたりしている。

神武の東征は、ウガヤ王朝からアラカヤ王朝への政権交代をモデルにして神話にしたもの、と朴柄植は解析する。神武自身は実在していなかったことになる。

神武の東征で平定されたといわれる土豪の長髓彦^{ながすねひこ}は、加耶系の男性名の典型例であつて、太陽の日と男性を表す子を合わせて日子^{ひこ}、つまりx x彦^{ひこ}となるという。ちなみに、その神話に出てくるヤタガラスは、高句麗のシンボルのな鳥だ。つまり、アラカヤ王朝は、高句麗・百済の影響を受けてい

る。朴炳植は、それを「太陽からクマに宗旨替えした」と表現する。

② 第二期ヤマト王朝、アラカヤ王朝・金海^{キキ}金氏の政權

仲哀天皇の死後（日本書紀によると神功皇后の摂政期間があるが、朴炳植はそれをほとんどでたためとする）、応神天皇から天智天皇までは、親百済の政權だ。天智天皇は、百済が新羅と唐の連合軍に攻められたとき、取り残された百済政府の官僚たちを救出するために倭国から救援軍を派遣したのであって、大敗を喫するのは覚悟の上だった（白村江の戦い）と解析する。

③ 昔氏^{セキ}ヤマト王朝

壬申の乱（国内最大級の内戦）によって、大海人皇子^{おほあまのおうじ}が天武天皇となる。天武天皇から称徳天皇まで。親新羅^{しんら}政權であり、使節を頻繁に送り合うなど、新羅との友好関係を大事にした。

④ 金氏（金海^{キキ}金氏）ヤマト朝廷

金氏が復活する。光仁天皇から現代までつながる。その間、幕府という軍事政權によって実質的に政權を奪われた。明治になって王政が復活したが、昭和期において軍部の暴走を止められず、敗戦の昭和20年からは「象徴」となってしまった。

天皇には姓がないとされているが、本貫が金海^{キキ}金氏だから、今上天皇は「金」という姓を持っていることになる。

この朴・昔・金は、新羅王朝の歴代王たちが名乗っていた姓と同じであり、彼らは古代から王族の系譜を持つ人たちだ。それぞれ何代かに渡って王位を継承していた。姓が変わるのは、「政変が起きた」からと考えていいだろう。

その新羅王朝と日本の朝廷が、そっくりの「変遷」を経ていることに驚かされる。

なお、古代の豪族・蘇我氏は、新羅・昔氏の直系の氏族だろう。王族といってもいいかもしれない。昔^{セキ}と蘇^ソが、発音が似ていることでも、関連性がわかる。昔氏は新羅での政權を金氏に奪われ、出雲に逃れた。出雲に伝わるスクナヒコナノミコトの伝説がそれを物語っているという。やがて蘇我氏として、ヤマト朝廷の中枢に入り、大臣として実質的に権力を握った。これらは新羅の金王朝を恨んで、百済や高句麗に接近し、その新羅に敵対的な態度を取り続けた。海を越えての派兵も何度かしている。これには金王朝も、悩まされたと伝えられている。その蘇我氏宗家も、645年の

中大兄皇子が中臣鎌足らによって起こされたクーデター、乙巳の変（大化の改新）によって政権を奪われ、没落する。昔氏は新羅に続いて、日本でも同じような目にあっている。

なお、稲目・馬子・稲目・入鹿の数代にわたる蘇我大臣の国内での政治的手腕は、仏教を取り入れるなど革新的だったから、見るべきものがある。日本書紀の編集者は（それらを聖徳太子「厩戸皇子」がやったように記述している）というのが私の見解だ。

彼は非凡な才能を持っていた、と私は断じたい。日本で、言語・歴史の研究をまとめ、「啓蒙的な仕事」を終えてから、アメリカに戻り、その地で2009年12月に亡くなった。享年79歳。世界をまたにかけるように飛び回っていた彼だ。何かと制約が多く、狭い国・日本や韓国などより、彼にとって一番住みやすい国はアメリカだったようだ。祖国への思いを引きずりながら旅立った。

16・日本語のルーツの最新研究

毎日新聞朝刊2021年11月22日の総合に「日本語の故郷、中国東北部。農耕を伴い3000年前に

九州に到達」と国際研究チームが発表したとある。以下、記事の要約・抜粋。

【日本語の元となる言語を最初に話したのは、約9000万年前に中国東北部地方の西遼河流域に住んでいたキビ・アワ栽培の農耕民だったと、ドイツなどの国際研究チームが発表した。



（本図は記事より引用）

朝鮮半島では農作物にイネとムギも加わった。日本列島へは約3000年前「日流語族」として、

水田稲作農耕を伴って朝鮮半島から九州北部に到着したと結論づけた。

研究チームの一人、マーク・ハドソン博士によると、日本列島では、新たに入ってきた言語が先住民である縄文人の言語に置き換わり、古い言語はアイヌ語となって孤立して残ったという。

このほか、縄文人と共通のDNAを持つ人骨が朝鮮半島で見つかるといった成果もある。」

この研究はすばらしい。研究者が国際的に、かつ専門分野を横断し、多くのデータを集めて科学的な手法で確かめたことであり、確度の高い結論だろう。確かに、九州北部には紀元前10世紀後期の水田の跡が見つかっており、言葉が3000年前に朝鮮半島から伝わってきたとの結論と一致する。稲作の道具や土器も半島のもとと共通だから、人の移動があったことになる。

「中国東北地方の西遼^{さいりょう}河流域に住んでいたキビ・アワ栽培の農耕民」が倭人と呼ばれた人たち（倭のルーツ）だった可能性がありそうだ。

縄文人と共通のDNAを持つ人骨が朝鮮半島で見つかったことも大きい。彼らは、互いに通じる共通的な

言葉話を話していたと考えられるし、舟で海峡を渡って行き来していたとも考えられる。

言語的に同じルーツを持ちながら、異なる民族として、ほとんど通じない言語をそれぞれが話していることが、改めて不思議に思う。

参考文献

- 「縄文語の発見」小泉保
- 「古事記と日本書紀の謎」（記・紀にみる吉備の首長たち）門脇貞二
- 「古代の道教と朝鮮文化」上田正昭
- 「日本人はどこから来たか」埴原和郎・編
- 「体から日本人の起源を探る」尾本恵一、埴原和郎・監著
- 「日本人新起源論」埴原和郎
- 「日本語の源流を求めて」大野晋
- 「日本語の起源」司馬遼太郎、大野晋、金思燁
- 「日本語の真相」李寧熙
- 「歴史群像シリーズ・朝鮮戦争（上・下）」学研歴史群像シリーズ編集部